



茜の巻物

2番目でOK



平安の都に、茜という名の若い女性房がいた。彼女は、相対的に季節の美しさを見つけのが何よりも好きでした。



春、庭には桜が咲く誇り、鶯の歌声が響きます。茜は、風に舞う花びらをそっと手に取りました。



夏には、夕暮れの庭に蛍が途中で、涼しい風が御簾を揺らします。茜は、その儚い光の舞をじっと見つめました。



秋の夜は、月が冴え冴え
と輝き、紅葉が錦のよう
に色づきます。茜は、そ
の月の光の下で、庭の草
花の露がきらめくのを見
つけました。



冬には、しんしんと雪降り積もり、すべてを白く染め上げます。茜は、雪の重みになる竹の美しさに心を奪われました。



茜は、心に残った美しい
こと、面白いこと、心に
惹かれることを、小さな
巻物に落ち着いていまし
た。



ある日、彼女は庭で、
朝露に濡れた蜘蛛の巣
が、まるで真珠の首飾
りのように輝いている
のを見つけました。



その様子を、近くを通りかかった別の女性房、花野がそっと見ていました。花野は茜の巻物に興味津々でした。



「茜さん、なんだか熱
心に考えています
か？」 茜は微笑んで、
巻物を開きました。



茜はこれからも、残り
ゆく季節の中で、心と
きめく瞬間を見つけ
て、その美しさを大切
に書いていこうと思い
ます。